

直喩において類似性をもつ機能

嶋 村 誠

I はじめに

何について描写するときでも、われわれはまず、これまでの経験を通して蓄積している知識に照らし合わせてみる。描写したい事態が馴染みのあるものの場合には、それを把握する認知プロセスも直接的であるから、事態把握がそれだけ容易であり、それを言い表すことばも見つかり易いであろう。

しかし、その事態がこれまでの経験のなかで馴染みの薄い、あるいはまったく初めての経験という場合には、それを把握するプロセスもおおのずから異なってくる。事態把握がそれだけ複雑化する。また、直接言い表すことばを知らないために、どのように表現したらよいかと頭を悩ますことも、日常生活の中でしばしば経験することである。

しかしそのような事態に対処する場合ですら、われわれは、これまでの経験を通して蓄積している知識に照らし合わせてなんとかしようとする。そうした対処のひとつとして、われわれは、すでに知っている事態と比較することにより、たとえば、それとどのように類似しているのか、あるいは、どのように異なっているのかという捉え方をする認知プロセスをたどりながら把握する、という事態把握の方法をもっている。

こうした比較の認知プロセスは、比較することをもっぱらの目的としている場合だけでなく、比喩という認知プロセスのなかにもみられるプロセスである。本稿では、類似性 (similarity) が比喩の認知プロセスのなかでどのよ

うな働きをしているのかについて考察し、その過程で、直喩 (simile) の特性の一端を明らかにすることを目的としている。

II 類似関係

認知言語学の言語観によれば、ことばによる描写には、必ず事態把握が随伴しているはずである。したがって、ことばによる描写が異なるならば、それは事態把握が異なっているからであり、また逆に、異なる事態把握が行われるならば、ことばによる描写も異なったものとなるはずである。したがって、ことばによる描写には事態把握のしかたが直接反映していると考えられる。

こうした考えが正しいとすると、われわれが行う事態把握のしかたがいかに多様かということは、各言語に備わっている単語の数が数え切れないほどあることを考えただけでも容易に推測できることである。これほど多くのことばをもっていれば、たいいてい事態把握のしかたを直接表現することばがありそうなものであるが、それでもなお不自由を感じることがあるということは、それほどわれわれは多様なものの見方をする事ができるということであろう。各言語使用者が言語に備わっている表現をすべて使いこなせるわけでもないし、さらに、言語そのものに無限に多くの表現が備わっているわけでもないことを考え合わせるならば、不自由を感じても不思議ではない。

そうした場合の対処法のひとつとして、事態把握が行われる認知プロセスの過程で、存在物と存在物の間に類似関係があることを見だし、それに基づいて把握が行われている場合がある。その例として、次の(1)を眺めてみよう。

- (1) 電車道から市場の中に通ずるいくつかの横町の角には、それぞれ縄が張ってあって、そこに白服をきた邏卒が二三人ずつ、杭のようにぼんやり立っていた。(石川淳「焼跡のイエス」)

この文において、語り手は「邏卒」すなわち見回りの兵卒の様子を把握して描写しようとしているわけである。その様子を直接適格に把握する方法がないのか、あるいはあえてそのような把握の仕方を避けているのかは定かでないが、「邏卒」と「杭」との間に類似点を見いだしていることは、記号化された結果「杭のようにぼんやり立っていた」という表現となって顕在化していることから伺える。

(1)は、直喩 (simile) と呼ばれる比喩表現の一種を用いた例である。一般に、比喩として認知するプロセスには、「喩えるもの」と「喩えられるもの」、そして「喩えの根拠 (類似性やアナロジーなど)」となるものの3つの要素が関係してくる。Richards (1936) は、これら3要素を順に「趣意 (tenor)」「媒体 (vehicle)」「根拠 (ground)」と呼んで区別した¹⁾。(1)において、趣意は「邏卒」、媒体は「杭」、そして根拠は「ぼんやり立っている」ということである。このように、例(1)においては、これら比喩の認知枠を構成する3要素がすべて比喩表現のなかに記号化されているが、比喩表現にいつもこれら3要素がすべて記号化されるとは限らない。例(2)においては、趣意と媒体は記号化されているが、根拠は文脈をたよりにしながら、同時に夢について自分が持っている知識をも動員しながら推し量るほかない。

- (2) おれはこの土地から笈を負って出ていって、遠い東京へ、本郷にあった養父の楡医院へ行ったのだったな、と徹吉は思った。すべてがなんと古く、なんと夢のようであることか。そういえば、実父に連れられて上京する折、苦勞をして関山峠を越えていったものだが、その夢をミュンヘンの下宿のベッドで見たこともあった。(北杜夫

1) 3つの要素の訳語は山梨 (1988, 14頁) に従っておく。なお、tenor と vehicle、それに ground を表す日本語訳や用語は、研究者によってまちまちである。そうした状況については、芳賀・子安 (1990, 6頁) に整理して紹介されている。また、英語においても別の用語を用いる研究者もあり、例えば、Ortony (1993) や Paivio and Walsh (1993) は、vehicle と ground は Richards と同じ用語を踏襲しているが、tenor の代わりに topic という用語を用いている。

『楡家の人びと』)

また、例(3)では、媒体だけが記号化されており、趣意は文脈から補い、根拠は、文脈を参考にしながら、遠雷について読者が自らの経験によって蓄積している知識に照らし合わせて理解することが期待されている。

- (3) この国では木の葉が落ちて風が冷たくなるころ、寒々と曇り日が続く。雪催いである。遠近の高い山が白くなる。これを岳廻りという。また海のあるところは海が鳴り、山の深いところは山が鳴る。遠雷のようである。(川端康成『雪国』)

このように、類似関係に基づいて成立していると言われている比喻には、媒体の存在を明示する表現を伴っている場合と、媒体の存在をいわば隠して表現する場合とがある。前者は、例(1)~(3)にみられる「のように」や「のようである」のような典型的な直喩によくみられるかたちであり、後者は、メタファーと呼ばれる。(4)は、「鬼のやうな」という直喩表現だけでなく、「鬼の」というメタファーの例をも含んでいる。

- (4) 戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、あの鬼の、鬼の良人のもとへ、ゑゑ厭や厭やと身をふるはす途端、よろよろとして思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の声、道ゆく悪太郎の悪戯とまがへてなるべし。(樋口一葉『十三夜』)

この例をみると、直喩表現から「やうな」をはじめとする媒体の存在を明示する表現を省略すればメタファーになるのではないかと思わせられるが、「やうな」を削除してもメタファーとして成立する文になるとは限らず、理解不能な表現になることも多いことを考え合わせると、直喩とメタファーの

違いは、媒体の存在を明示する表現の有無が決め手となっているわけではないことを示している。

Ⅲ 比喩と比較

比喩表現には比較という要素が伴っていることはすでに見た。しかし、比較はあくまでも比喩という認知プロセスを構成する一要素にすぎず、比較表現がすべて比喩表現としての働きをもっているわけではない。例えば、(5)や(6)においても、比較によって類似性がとりあげられているが、この種の表現がもつ役割は、もっぱら比較だけであって、そこに修辞性は感じられないため、直喩とは考えられない。

(5) 私は君に似ているだろうか、君はどう思うと云って、F君を見た。
(森鷗外「二人の友」)

(6) 見れば見るほど、一郎さんの頭はお父さんにそっくりだね。(吉行淳之介『砂の上の植物群』)

発話としての役割を果たしている限りは、これらの表現も新しい情報を含むものであるに違いないが、そこで取り上げられている類似性についての情報は、聞き手にとって、いわば想定範囲内のものであり、意外性は伴っていない。修辞性をともなう直喩としての役割を果たすためには、比較されているものの間の類似性に意外性が伴っていなければならない。これまでにみた(1)~(4)の例にみられる類似性には、いずれも聞き手の予測を超えた意外性が感じられ、それゆえ、単なる比較でなく直喩としての修辞性が認められる。

しかし、類似性に意外性を感じるかどうかは絶対的基準によって決まっているわけではなく、すべての言語使用者が意外性を感じるであろうと思われるものもあれば、人による変異がみられるものもありそうである。(7)の一節には比較を伴う表現が3箇所見られるが、「骸骨」と人との比較による類

似性に意外性を感じるか否かによって、修辞性を伴う直喩表現と見なされるか否かが左右されると考えられる。

- (7) ほんとうに、そのときは木乃伊のようになりまして、骸骨と同じでした。ちょうど細川のところの置物に骸骨の標本がございまして、それが主人とそっくりでした。まだ暑いときのことですから、蛆を湧かせる蠅を防ぐため昼間でも蚊帳を釣っておりまして、あの白い蚊帳を透かして見ると、ほんとうに骸骨と瓜二つです。細川の義姉が気持悪がって、置物の骸骨をどこかへ蔵ってしまいました。(井伏鱒二『黒い雨』)

IV 直喩の形式と意味

直喩の形式にはいくつかの種類がある。まず、

- XはYのようだ
 XはYみたいだ
 XはYに似ている
 XはYにそっくりだ

というように、類似性表現が述語を形成しているものがある。(8)～(12)はそのような例であり、それぞれの類似性に意外性が含まれているため、直喩としての役割を果たしている。

- (8) 人がゴミのようだ。
 (9) 酒屋の店さきの水道の水は出っぱなしで、小僧が一升徳利を洗っている。味噌樽がずらりと並び、味の素や福神漬や、牛鑑がずらりと並んで光っている。一口坂の停留場前の三好野では豆大福が山のようだ。(林美美子『放浪記』)

- (10) ここはまるで地獄みたいだな。
- (11) 金物店というのはどことなく人気のない水族館に似ている。(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)
- (12) 下の娘さんは、もの腰といい、顔かたちといい、どうもシャクナゲの花そっくりだ。(山本有三『路傍の石』)

次に、

Yのように
Yのごとく
Yように
Yみたいに
Yに負けず劣らず

などのように、直喩が副詞句として用いられる場合も多く、(13)～(17)は、それらが用いられている例である。

- (13) 女は剣のようにびんとした姿勢で、肉体が幻影のように見える。
(石川淳「かよい小町」)
- (14) 私の腹の傷口は悪鬼のごとく痛んだ。(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)
- (15) のどにとげがささったように苦しんでいた。(吉平敏行師説教 2009. 5.31)
- (16) ……、子供はまたそれをニッキ噛むみたいに、ちょっとクチャクチャやって甘さがなくなったらすぐほかし、……(野坂昭如『アメリカカひじき』)
- (17) そして藍子は相手に負けず劣らず途方もない作り話をした。(北杜夫『楡家の人びと』)

また、形容詞句として、例えば、

YのようなX

YみたいなX

Yに似たX

YそっくりのX

というかたちで(18)～(21)のように用いられる場合も多い。

- (18) 平田大佐は、後からついてきた玉井所長たちに室内に入ることを荒い口調で禁じた。玉井たちと艦の建造を通じて友人のような親しみを抱いていた監督官たちも、その時から純然たる海軍軍人として、玉井たちとの間に一線を劃したのだ。(吉村昭『戦艦武蔵』)
- (19) もう、二どと、あんなことをしたらあかん……子供みたいな喜助はんの心に、申しわけがない……(水上勉『越前竹人形』)
- (20) 実際には、素足に見えるすきもなく、小鳥の羽づくろいに似た速い操作であった。(石川淳「かよい小町」)
- (21) 空の隅に鯛の群れそっくりの雲が浮んでいる秋のよいお天気だったので……(倉橋由美子『聖少女』)

形容詞句として用いられる直喩の形式だけでも多種多様な表現がみられるが、ここではそのいくつかを(22)に挙げるに留める。中村(1977)は、本稿で直喩と呼んでいるものにはほぼ等しいと思われるものを「指標比喩」と名付けて、おびただし数の形式の直喩表現を列挙している。直喩の媒体を提示するための表現の数に制約はなく、ある種の意外性や驚きを伴う類似性を表現することばづかいでありさえすれば、どんな表現でもよいと考えられる。

- (22) Y顔負けのX

Yも同然のX
Yに負けないX
Yも驚くX
Yに（も）紛うX
Yと同じようなX
Yと同様のX
Yと同列のX
Yに類するX
Yに類同したX
Yに類似したX
Yに似通ったX
Yに相似のX
Yに酷似したX
Yに近似したX
Yに疑似のX
Yと一脈通じるX
Yと並ぶX
Yに匹敵するX
Yに敵するX
Yと同工異曲のX
YとどっこいどっこのX
Yと大同小異のX
Yと五十歩百歩のX
Yと似たり寄ったりのX
Yに近いX
Yを彷彿とさせるX
Yに生き写しのX
Yに丸写しのX

Yに瓜二つのX
 YそのままのX
 Yと同断のX
 Yと見間違えるX
 YそのままのX

また、意味的にみると、

YめいたX
 Y風のX
 Y形のX

のように、質的な類似性を捉えてできあがっている(22)～(24)のような直喩もあれば、

Yほど
 Yくらい
 Yよりも

のように、量的な類似性を捉えてできあがっている(25)～(27)のような直喩もある。

- (22) 「同志」たちが、いやに一大事の如く、こわばった顔をして、一ブラスーは二、というような、ほとんど初等の算術めいた理論の研究にふけているのが滑稽に見えてたまらず、……(太宰治『人間失格』)
- (23) おかみさん風の女は、そう云ってさめざめと泣きだした。(井伏鱒二『黒い雨』)

- (24) ネリはだまってきれいで包んだ小さな卵形の頭を振って、唇を噛んで走った。(宮沢賢治「黄いろのトマト」)
- (25) 鳥村はその真剣な響きに打たれ、額に皺立て顔をしかめて懸命に自分を抑えている意志の強さには、味気なく白けるほどで、女との約束を守ろうかとも思った。(川端康成『雪国』)
- (26) 女の印象は不思議なくらい清潔であった。(川端康成『雪国』)
- (27) 全く彼は驚いてしまったと言うよりも叩きのめされてしまったのである。(川端康成『雪国』)

V 直喩による類似性の認知枠の強制

直喩による類似性をもつ働きはさまざまである。趣意について描写するにあたり、聞き手や読者がすでによく知っていると思われる媒体を引き合いに出すことによって、分かりやすい描写にするという効果をねらったものと考えられる場合もある。「YのようなX」という場合に、例文(28)においては、地面の上へ描きはじめてのもの(趣意)がどんなものかということを説明するために、媒体として「円」を持ち出している。円なら誰も馴染みのあるものであり、どんな特徴を備えたものが明瞭な既知のもののはずであるから、喩えとして有効であろうものもくろみが働いているものと考えられる。

- (28) この時先生は起き上って、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう云い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。(夏目漱石『こころ』)

一方、(29)をみると、媒体が既知のものでない場合もあり得る。(29)は、急に下宿のひとり住まいになったものの、自分には何の縁故も無いところにひとりで生活して行く能力などなかったということを述べた文である。すべての読者が「誰かに襲われ、一撃せられる」経験をもっているわけではなく、むしろそのような経験のない読者の方がはるかに多いのではなからうか。し

かし、そのような経験のない読者であっても、そうした出来事についてこれまでに報道などを通じて聞いたことがあれば、直接の体験による知識がなくてもそれがどんな思いかということは比較的容易に理解できるであろうから、直喩の媒体としては十分に成り立っていると考えられる。

- (29) 自分は、下宿のその部屋に、ひとりでじっとしているのが、おそろしく、いまにも誰かに襲われ、一撃せられるような気がして来て、街に飛び出しては、れいの運動の手伝いをしたり、或いは堀木と一緒に安い酒を飲み廻ったりして、ほとんど学業も、また画の勉強も放棄し、高等学校へ入学して、二年目の十一月、自分より年上の有夫の婦人と情死事件などを起し、自分の身の上は、一変しました。
(太宰治『人間失格』)

人生の早い時期に誰でもがあらゆることを経験しているわけではない。それゆえ、直喩の媒体として用いられているものを読者がすでに経験によって知っているという保証はない。そのような場合には、直喩の媒体が理解されるかどうか分からないままに読者にぶつけられ、いわば筆者によって創設されたかたちの認知枠が、直喩によって読者に強制されていることになる。

このように、直喩においては、類似性の認知枠の強制という手段を用いることが可能である。メタファーにおいてこのような手段を講じると理解不能に陥ってしまうと考えられるが、この点については稿を改めたい。

VI まとめ

メタファーも直喩も類似性に基づくレトリックであるが、本稿では、類似性が比喩表現においてどのような機能を果たしているのかということと、とくに直喩表現を中心に考察した。

(筆者は関西学院大学商学部准教授)

引用文献

言語資料として使用した以下の文献は、すべて『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社、1995年に収録の版を用いた。

- 石川淳「焼跡のイエス」『焼け跡のイエス・処女懐胎』
 石川淳「かよい小町」『焼け跡のイエス・処女懐胎』
 井伏鱒二『黒い雨』
 川端康成『雪国』
 北杜夫『楡家の人びと』
 倉橋由美子『聖少女』
 太宰治『人間失格』
 夏目漱石『こころ』
 野坂昭如『アメリカひじき』
 林芙美子『放浪記』
 樋口一葉「十三夜」『にぎりえ・たけくらべ』
 水上勉『越前竹人形』
 宮沢賢治「黄いろのトマト」『銀河鉄道の夜』
 村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』
 森鷗外「二人の友」『山椒大夫・高瀬舟』
 山本有三『路傍の石』
 吉村昭『戦艦武蔵』
 吉行淳之介『砂の上の植物群』

参考文献

- Deignan, Alice. (2005). *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gibbs, Raymond W., Jr. (1999). "Taking Metaphor Out of Our Heads and Putting It into the Cultural World," in Gibbs, Raymond W., Jr. and Gerard J. Steen, eds. *Metaphor in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 145-166.
- Goatly, Andrew (1997). *The Language of Metaphor*. London: Routledge.
- Lakoff, George (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1999). *Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.
- Lakoff, George and Mark Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- Miller, George A. (1993). "Images and Models, Similes and Metaphors," in Ortony, Andrew, ed. (1993), pp. 357-400.
- Ortony, Andrew. (1993). "The Role of Similarity in Similes and Metaphors," in Ortony, Andrew, ed. (1993), pp. 342-356.
- Ortony, Andrew, ed. (1993). *Metaphor and Thought*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge Univer-

sity Press.

Paivio, Allan and Mary Walsh. (1993). "Psychological Processes in Metaphor Comprehension and Memory," in Ortony, Andrew, ed. (1993), pp. 307-328.

Richards, Ivor Armstrong. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford University Press. (邦訳：リチャーズ、I. A. (石橋幸太郎訳) (1961). 『新修辞学原論』南雲堂.)

佐藤信夫 (1978). 『レトリック感覚——ことばは新しい視点をひらく——』講談社. (1992. 『レトリック感覚』講談社学術文庫、として再版.)

中村明 (1977). 『比喩表現の理論と分類』(国立国語研究所報告 57) 秀英出版.

芳賀純・子安増生 (編) (1990). 『メタファーの心理学』誠信書房.

山梨正明 (1988). 『比喩と理解』(認知科学選書 17) 東京大学出版会.